都の伝説

目次

① 安徳天皇御陵墓の伝説に就いて
○経路に二つの説
○釜谷の岩屋・都おどりの初め
② 中の屋敷と主家屋敷について
③ 山路の桜
④ 笹葉様
⑤ 乳母様と柴木（柴吸いの峰）
⑥ 鳥帽子岩
⑦ 遊行寺
⑧ 不入山と御宝釜床
⑨ 横倉山
⑩ 山内神助（平重詮）
⑪ 都行在所見張番
⑫ 産土の神↓（白王八幡宮）
⑬ 都神社（山内神助の社）
⑭ 焼野権現

① 安徳天皇御陵墓の伝説に就いて

現在、都に残っている安徳天皇御陵墓の伝説についてお話をしてみたいと思います。

日本の歴史では、文治元年（一一八五）三月二十四日、長門の壇之浦の戦で平家は滅亡し、安徳天皇は乳母仁位の尼にいだかれて御入水せられた事になっておりますが、平家の一族は、諸国各地にのがれて、其の伝説地は全国に二十数ヶ所に及び、又安徳天皇御陵参考地は十数ヶ所もあります。

此の都にもやはり安徳天皇御潜幸の伝説が、今尚残って居ります。

安徳天皇の伝説地として都にたどりつく御径路については、二ツの説があり、その一ツは一般的に云はれています、文治元年二月十九日、屋島壇ノ浦の戦に敗れた平知盛は、安徳天皇を奉じ田口成良に導かれて阿波国三好郡山城谷へ赴き、美馬郡東祖谷へのがれました。

祖谷から土佐の国、香美郡の韮生にはいられ尾根づたいに香北町在所、土佐郡大川村、本川村の越（エ）裏門（リモン）、吾川郡池川町の椿山などの行在所を経て吾

川村奥名野川に移り、峠越をこえらえた一族は、けはしい処を天皇様のお手を取って通られたと云う手引を渡られ、仁淀村高瀬の掛水行在所におつきになりました。暫く御滞在になり、都の行在所が御造営になって掛水を出発せられ、ホウヂクの奈路、アカラギ峠を経て、文治二年六月、都に御安着せられたと云う説と都に傳はるもう一ツの説に依ると長門の壇ノ浦で敗れた平家は、安徳天皇に供奉して伊予地に渡り久万山に入られ、文治二年（一一八六）三月、別枝の都に御安着せられたと云う説であります。

この説によりますと淡雪の降った大きな峠にさしかゝった時、お供に背おはれていた天皇様は、「皆の者、此の旅は草履を後先に履き、杖を左について歩むべし、敵の悟るときは此の者は西に歩むと悟るべし」と申されて、敵に気を配られ後を見ながら越された故に此処を見坂の峠といゝ、渡りなき仁淀川を若者の背で渡られた「若身郡」や御休息せられた休場を経て楢藪に入られ、一族共待合はされた待木を越され前方の深山に見える大きな岩山を目当てにたどりつかれたのが釜谷の岩

屋であります。
文治二年三月三日、釜谷の岩屋にたどりつかれた一族は、しばしの間雨宿りをされて、長旅の御疲労もおいといなく先づはこれで一安心と非常に御安堵せられました。
華やかなりし京の都を偲ばれながら

山の中でも岩屋でも
住めば都よ我が里よ

と歌はれ、盆をたゝいて踊られたのが、都おどりの初めであると伝へられています。
これから都行在所のお住いが始まるのですが、都に今も尚残っている史蹟伝説の各所についてお話を致します。

② 中の屋敷と主家屋敷について

行在所は、釜谷の岩屋から中の屋敷へ、丸木柱に柴の屋根の仮御所が出来ておうつりになりましたが、用水の便が悪く、主家川の湧水をたよりに主家屋敷に御造営せられたのが都行在所でありま

す。この水源の湧水を主家川と呼んでおります。

③　山路の桜

都の山里にもいつしか春が訪れ、山々の木の芽もゝゆる頃となりました。主家屋敷よりはるか南方に、桜の大木が密林の老木の中にひときは高く今を盛に美しく咲誇っていました。

天皇様にお花見をして頂こうと、上の川の桧の大木に櫓をかけて御遠望されましたが、あまりの美しさに天皇様は、山路をたどられ桜の大木近くまで御幸遊ばされて、いつまでもごらんになりました。

あしのべの山路の桜さきそめて
そめし都の春ぞおしかれ

とうたはれて、此の桜を山路の桜と呼ぶようになったと云はれます。

④　笹葉様のいはれについて

わびすまいの中にも天皇様は、青葉の笛を御愛

用されて京をしのばれていました。
春ともなれば都の里もかすみにつゝまれて、山路の桜もらんまんと咲く頃お花見に行幸された。途中ご持参の笛を地中にさかさまにして突きさし「この笛が笹になれ」申されました。
不思議にもこの笛に芽が出て笛竹となりました。天皇様は、すゝきをお取りになって円く囲いをつくられて、この境より外に芽を出してはならぬと申されたのが、今も尚、変る事なく円形におい繁っております。これが笹葉様であります。

⑤　乳母屋敷と柴木（柴吸いの峰）

乳母屋敷については、山内神助は主家屋敷より三00米余り南の方に、天皇様の乳母仁位尼のお屋敷をお造りになってこゝで日常お住まいをせられました。今は、唯屋敷の跡だけが残っています。
天皇様は、乳母をおしたい申し、度々乳母のもとにお立寄り遊ばされましたが、其の途中、小高い畝（ウネ）に山梅の木が茂っていました。天皇様は、この酢味のある山梅の葉をお取りになって、これを

お吸いになったことから、柴吸いの峰と名づけられ、今はこゝを「しばき」と呼んでいます。

⑥　鳥帽子岩

行在所の東上方の山の中腹に、見張番が出ていた大きな岩があります。安政の地震に倒れたと云はれます。

天皇様は、度々この岩の処にお出ましになり、主家屋敷の行在所を心豊かに御展望になり、時々鳥帽子をお取りになって、此の岩の上に置かれたので、この岩を鳥帽子掛の岩と云っています。

⑦　遊行寺

都行在所の向の小高い山にお寺を建立られて、御先祖様をおまつりになりました。

天皇様は、度々お弁当をお持参でお寺に参詣になり、日々発展してゆく山里、都をはるばる御展望になり、しばしお休みになられた事から遊行寺と名づけられたと云います。

⑧　不入山と御宝釜床

行在所から五百米位はなれた処に不入山がありますが、此処には、樅、栂、樫など大昔から伐ったことのない老木が生い茂ったトネでありました。こゝに不入宮があり、不入の神が祀られていました。この宮は、其の昔、安徳天皇が御宝物を秘蔵されるため建てられたのでありますが、大正六年不入の大神は、白王八幡宮の御社へ合祀され、今は部落有の植林となって居ります。

又、不入山に秘蔵されていた御宝物は、天皇様が崩御の際、御遺言によって山内神助が主屋屋敷の傍に埋蔵して、上部に焼石をならべて外観をお釜床によそうたので、御宝釜所、又はお釜床と呼ばれお祀りして居ります。

⑨　横倉山

表向では、平知盛外平家一族八十五名は、文治三年(一一八七)八月、安徳天皇をお供して都をお立になり、泉の平家岩屋鳥形の更衣ヶ奈路、桟敷ヶ奈路、中宮を経て山を登り、横倉山に向はれた事になっていますが、敵に探知されることをおそれ、秘かに安徳天皇は、山内神助がお護りして

都にとゞまられたのであります。
神助夫妻は、心より天皇様におつかへし、御不自由な中にも、また楽しい日をおすごし遊ばされていましたが、おしくも建久六年（一一九五）八月二十二日正六ッ時、御歳十八才の若き御身を以て崩御されたと伝へられています。
御陵墓は、「皇陵様」と呼んで、今尚、旧八月二十二日、都踊を奉納してお祀りを続けています。

⑩　山内神助（平重詮）

山内神助につきましては、天皇様崩御の後は、里人と共に天皇様の死を惜しみ、わびしい日が続いていましたが、天皇様の御霊をおまつりすると共に、都の開発に努力せられ、生涯を都村の開拓に身をさゝげされましたが、承久二年（一二二〇）十一月三日、六十六才で天命を全うせられました。夫人菊之条も同時に殉死されたと伝えられています。
山内神助の墓は、昔のまゝに残っていますが、十四代、西森神九郎の時代、慶長五年（一六〇〇）十一月、山内一豊公が土佐の城主として御入国に

行在所へ召されての帰り途、芋生野春日神社の上流デコケ岩屋へさしかゝったとき、暗夜に川下から誰れとも知れない火つけ者が十五歩、十歩、五歩と近づいてくる。殿御も息をころして火つけ人の方へ近づいていった。

その時、殿御は山もさけんばかりの大声で「だれか」と誰何(スイカ)したが、答はなく火つけ人は、つけた火を投げすてゝ刀をぬこうとした。

その瞬間、桂木殿御は、すでに鞘をはらった刀で一刀をあびせた。火つけ人はどっとその場に倒れた。

冬枯れの野辺の白雪を鮮血に染めて倒れたものは、鳥出生丹であった。

当時、都行在所の厳しい御定として夜間往来の火つけをかたく禁じられていた。

夜間法度の明り火を侵した生丹が、同役に討たれたことはあまりにも無念な最後ともいうべく村人達は、悲哀の涙にむせんだ。彼のなきがらを見張所近くまで運んでいたが途中で、不思議にも死がいが急に重くなって一歩も歩めなくなった。

人々は、生丹の霊がこの付近に葬れと云う知らせと信じ、岩屋川の畔りにねんごろに葬ったといわれる。その後、幾百年の星霜を径て、ある年の大洪水に墓所も流失して、その跡すら分からず、今は大規模林道の道路敷地となっているが、昭和の末期、福留進氏が其の墓石と思はれる石を、鳥出見張番所の近くまで上げてねんごろにお祀をしている。

⑫ 産土の神↓白王八幡宮

山内神助は、武運の守護神白王八幡宮の御霊を勧請して此の地に来られました。

都の行在所も定まり、天皇様をお護りして都の開拓にいそしまれる事になり、一族の産土神としてお祀りになりました。

明治より大正の初めの別府村長、菅原薫治著、別府村史巻一の應本白王八幡宮の由緒に依れば、「文治二年丙午年、讃岐八島檀の浦の大乱に安徳天皇御入水と唱へ、供奉仕来人数七十五人の内の一人、山内神助が、八幡宮の御神鏡を供戴して初めて宮古を開き、八幡大神を奉鎮祭して安徳天皇

の武運を祈らせ給ひし神社にして白王は、皇を割きて二字となしたるものなり。当時、敵兵に探知される事を恐れ、秘密にする為め白王の二字を以って天皇の建立したるを意味する社名なり」云々とあるも何時の時代からか白皇八幡宮となり、又高知県神社庁には八幡宮と登録されていました。これは、終戦後、昭和二十七年八月二十五日、宗教法人として登記された際に、時の宮司、中平数馬氏の申請に依って登録されたものと思はれますが、神社の由緒書も神社庁の登録とも異なって、白皇八幡宮となったかについてわ、その理由はわかりませんが、本殿に蔵される数々の棟札に記されている御社名は、總て白王八幡宮となっています。其の主なものを記るせば次の通りであります。

元禄二年十一月（一六八九）
奉新造　應本白王八幡宮御宝殿一宇
正徳五年十一月（一七一五）
奉棟造　應本白王八幡宮一宇
享保十八年十一月（一七三三）
奉宮建立棟札應本白王八幡宮

宝暦二年十一月（一七五二）
奉棟造　應本白王八幡宮一宇

以上、保存されている棟札を見ても今より（一九九０）三００年の昔、約二十年毎に棟造りをせられ、其の度に造られた棟札の全てが、御社名は應本白王八幡宮となっています。此の棟札の御社名と別府村史の記事に基き、御社名を白王八幡宮に復元して神社本庁の承認を受けて、昭和六十二年九月四日登記を完了して、高知県神社庁並に高知県知事の認証を受けました。

⑬　都神社（山内神助の社）

安徳天皇当地に御潜幸の砌、従者の一人、山内神助は、平家の一族が横倉山に移った後は、帝をお守りして都にとゞまり、奉仕せしが帝はおしくも建久六年八月二十二日正六ツ時、御歳十八才の若さの御身を以って崩御遊ばされたのである。帝崩御の後は、ひたすらに帝の御法要につとめる傍ら、生涯を都の開発に身を挺したが、承久二年十一月三日、六十六才で逝去せられました。都開拓

の大祖山内神助を都神社として昭和八年に白王八幡宮に合祀されました。

⑭　焼野権現

山内神助より五代目、山内神左衛門の娘が伊予の猪伏に嫁入りをしていたが、里帰りしての帰り道、行方知れずとなった。山内家では大騒となり、村人と共にオヌタ山のトネを捜索したところ、樅の大木のウトに娘の手拭がかゝっているのを発見した。神左衛門は家伝の槍を以って此の木をタメた処、忽ち大木は鮮血に染まった。神左衛門は、大いにいかり娘の仇討ちと、この大木に火を放って焼き払った処、娘を殺していた牛鬼は、二重殺しまでされたと怨みは深く、山内家に崇ったので、現地に焼野権現として祀っていたが、大正初年、白王八幡宮に合祀された。ガンなど如何なる難病もトビヒとして祈願すれば霊験灼で参拝者が多い。

（作者不詳）